

医学部内 高嶺徳明顕彰碑

いいそ〜ぐわちで一びる！ きじむんやいびーん。皆さん、今年もどうぞよろしくおねがいします。
今回は、医学部にある高嶺徳明顕彰碑を案内します。

たかみねとくめい

高嶺徳明顕彰碑

琉球大学医学部構内がじゅまる会館前の広場に高嶺徳明顕彰碑が建立されたのは平成5(1993)年12月1日です。沖縄県医師会の寄贈によるもので、琉球王国において初めて全身麻酔を用いた口唇裂の手術を成功させたと記録されている久米村士族・魏士哲（高嶺親方徳明：たかみね・おやかた・とくめい）の業績を顕彰しています。

ぎしてつ

魏士哲（高嶺親方徳明）とは

魏士哲は順治10(1653)年生まれで、もともとは久米村の出身ではありませんが、中国語の能力を評価されたことで久米村に入り、魏姓を賜りました。久米村とは現在の那覇市久米のことを指し、この地には通訳等で琉球王国の対中国外交を支えた人々が代々住んでいました。中には、明朝時代に福建から移住した中国人（閩人三十六姓）の子孫もおり、魏士哲も彼らと同じく、久米村の役人として勤めをはたしていました。

康熙27(1688)年、魏士哲35歳の時に、進貢船の小唐船協通事（進貢二号船在船通事）として福州へ赴きました。この時、福州に来ていた水主(水夫)のひとりに、生来口唇裂であった与那嶺という者がいました。五主(ごしゅ：貿易の実務担当者)として福州にいた与那嶺の妻の弟である大嶺詮雄（おおみねせんゆう）は、中国語が巧みであったため、福州に口唇裂の治療ができる医師の存在を知り、与那嶺に治療を受けさせることができました。

この話を聞いた進貢使節の正使や副使は、魏士哲にこの医師から手術法を学ぶよう指示します。というのも、当時、王孫(後の尚益王)が口唇裂であったためでした。与那嶺を治療した医師は黄会友という名で、魏士哲は彼の元で学び、薬方など「秘書一巻」を得て康熙28(1689)年の5月に琉球に帰国しました。その後、琉球国内の口唇裂の男女を治療した後、同年12月に王孫の尚益の治療に臨み、成功したと魏士哲の家譜に記されています。

魏士哲が手術を成功させたとされる康熙28(1689)年は、和歌山の華岡清洲が麻酔による乳がんの手術を成功させた1804(嘉慶9・文化元)年より100年以上もさかのぼります。医療史の立場から揺るぎない確証が得られているわけではありませんが、今後の研究によってさらに明らかになることがあるかもしれません。

まだまだ、紹介していないスポットがあります。詳しくは次回に！（執筆担当 T）

参考文献

東恩納寛惇「医方漫談」(『東恩納寛惇全集』第9巻、1981年)

那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料編1-6 家譜資料(上)(那覇市企画部市史編集室、1980年)

池宮正治・他『久米村-歴史と人物-』(ひるぎ社、1993年)

琉球大学医学部附属地域医療研究センター編『沖縄の歴史と医療史』(九州大学出版会、1998年)

